

大正二年十月十日發行

婦人と子ども

第十三卷
第十號

フレールベル會

第十三卷第十號目次

保姆論(二)

英文學にあらはれたる子供(十)

岡田 みつ

○『デミ』と『デージー』(アルコット)

鴈の歌

久留島武彦

手工應用玩具の造り方

藤 五代策

机邊だより

○兒童の繪畫(タネル)

子供展覽會に就て

倉 橋 生

大道玩具の研究

K T 生

附 録

美學講話

菅原 教造

本誌定價

一冊郵税共金拾壹錢 六冊前金郵税共六拾錢
拾二冊同金壹圓貳拾錢 郵券代用一割増

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ
込み下さい。直に御送本致します。(振替口座東京一七二六
六番)

本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます

(庶務上保姆紹介に關する件を含む)の御手紙は
東京市小石川區久堅町七十四番地フレイベル會事
務所宛

會計事務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内、
雨森鋤宛

本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下代々
木山谷一二四倉橋惣三宛

大正二年十月七日印刷
大正二年十月十日發行

編輯兼發行者 東京府豊多摩郡代々幡村大字代々木山谷一二四
倉 橋 惣 三

印刷者 東京市本所區番場町四番地
平 井 登

印刷所 東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 東京市小石川區久堅町七十四番地
フレイベル會

婦人と子ども

第十三卷 第十號

保 姆 論 (二)

△保姆の素養

保姆の第一資格に就ては前に述べた通り（本誌第十三卷第五號）であると思ふ。しかしながら、此の本質的資格を具へて居る人が、すべて良保姆として幼児教育の實績を擧げ得るといふ譯にはゆかない。人が其のハタラキを完ふするには、道具がなくては出来ない。保姆の道具は何が。即ち幼稚園教育者として必要な知識の素養である。

吾人は、教育上に人格の力を尊重すること恐らく何人にも譲らないものである。殊に教育の程度（知識的に）低ければ低き程、教師の人格に最も

多く信頼しなければならぬことを主張するものである。即ち此の意味に於て、保姆ほど人格的要素に富める教育をするものはないと言つてもよい位である。しかしながら、これを以て、保姆の學問的素養不必用論にかこつけて仕舞ふことは出来ない。人格は力である。そのハタラキは知識によつて道をたてられなければならないのである。

教育學の發達せる當代に於て、最も奇妙なることは、幼稚園の保姆位、何人にでもすぐ出来るといふ思想である。素より更めて斯ういふ露骨な言をなす人は多くあるまいと思ふのであるが、斯ういふ心持は案外多くの人がある。心持とし

て有するばかりでなく、随分實際の上に無遠慮に實行されて居る。而して、此の心持を解剖分析して見るならば、幼稚園教育に特殊要素の必要なることを認めて居ないことになる。すべてのものが専門的になり、學理的秩序的準備を必要として居る今日に於て、餘りといへば舊式な思想といはざるを得ない。乃至、幼稚園教育を侮辱することの甚しいものと憤慨もして見度くなるのである。勿論保母は知識を教ゆる教育者ではない。理科の教師に理科の素養がおり、語學の教師に外國語の素養がおりといふ意味に於て、保母に専門の學問が必要な譯ではない。それは言ふまでもないことである。しかし幼稚園といふ特別の教育を行ふに、その特別の準備知識が無くてよいといふ理が何處に立ち得るであらうか。之れは一層いふまでもないことである。

△幼稚園教育の準備知識

此の言ふまでもないことが能く徹底しないのは詰り、幼稚園教育に如何なる準備の知識が必要であるかといふことが分つて居ないからである。次にその主なるものを列擧して見度い。

一、兒童發達概論。教育があつて兒童があるのではない。兒童があつて教育があるのである。何故に幼稚園教育が行はれなければならぬかといふことを最正しく循理的に理解せしむるものは、兒童研究である。但しこの場合、學齡期や、青年期の心理生理に就てくはしく知る必要はないのであるから、兒童發達の一般概論に於て、幼兒期の人生に於ける意義、價值、等を明かにすることが必要である。

二、幼稚園教育の目的。教育の目的が定まるのは兒童期の意義ばかりからではなく、種々の他の條件も與つて來るものである。今日の此の時代と社會とに於ける幼稚園教育の要求せらるる、目的如何といふことは、可なり廣汎なる多方面の考究を

俟つて初めて根本的に闡明せらるゝものである。

幼稚園教育の歴史の如きも、此の中に含まるゝ問題の一つになる。また幼稚園の種類に關する研究も此の中で明かにせらるべきである。

三、幼稚園期兒童の心理。これは兒童發達概論とは別の目的に於て研究せらるゝものである。即ち幼稚園教育の方法を研究するために、先づ其の教育の客體を明かにするのである。即ち幼稚園方論の科學的根據を與ふるものであるから、充分精密に確實に討究せられなければならない。

四、幼稚園教育法の原理。幼兒の心理に基いて幼稚園教育法の質的、量的兩面の原理を明かにするのである。即ち質的方面に於ては、普通教育學に所謂、教科の排列、教材の撰擇といふ類の問題を研究し、假令ば幼稚園教育に於て何故にお嘶が用ゐらるべきか、また如何なるお嘶を用ふべきかといふ類の原理を明かにする。また量的方面に於ては、其の教育の時間、程度等の方面の問題を正

しく解決すべき原則を明かにする。而して之れが一般論と各論とに分たれることは必然であつて、各論に於ては、原理ではあるが餘程具體的に實際的な論述に入るべきものと思ふ。つまり普通教育學の方法論にあたる處であつて、從つて教授的、訓育的兩面に涉らなければならない。但し、その關係が普通教育學と大に趣を異にする處あるべきは論を俟たない。

五、美學に關する一般知識。之れ亦幼稚園教育者に限つたものではないが、亦缺くべからざるものである。而して此の中には所謂美育に關する一般原理と、美術の各問題中、假令ば色彩とか形態とか音楽とかに就ての各論的簡單なる原則とが含まれる。つまり幼稚園の教育手段として用ゐらるゝ、いろゝの教科に關する知識を與ふるものである。

六、自然物に關する知識。幼稚園教育中最も直接に必要な生ずる知識は自然物に關する知識であ

る。勿論純粹の科學としての組織的知識を要する程のこともないが、幼兒の周圍にある動植物等について、一般的——併し確實なる知識は有して居なければならぬ。之れは特別に幼稚園教育者にのみ限つた知識といふのではないけれども、必ず缺くべからざる準備知識の一つとして、必要なものである。

七、幼稚園管理法。之れは一人々々の保姆として直に必要なことではないかも知れないが、幼稚園の設計、設備、乃至計理事務等に關し、たとへば園長としての事務を行ふ場合の爲めに、一通りは通じて置く必要のあるものである。

八、尙ほ以上の他に、幼兒衛生の知識及び種々の技術上の熟練を要することはいふまでもない。

英文學にあらはれたる子供 (十)

東京女子高等師範學校教授

岡 田 み つ

『デミ』と『デージー』

(米國の女作家オルコット(Alicott)女史の著 Little Women 中の一節)

デミとデージーは双生兒ふたごで、デミは男の兒、デージーは女の兒です。二人とも四歲位になつて居ますが、飛んだ吾儘者になりさうな位に持て囃はなされ切つて居ます。此子達は、生後八月で歩き初め

ヤンと食卓に着いて、人が賞めそやす程に行儀が宜いとて、親の目からは、素より、世にも珍らしい子なのです。

滿一年ですら、物言へて、二歳の時には、チ

デージーは、三歳の時に針をと強請まがで、四針しか縫目のない袋を拵しらへた事もありますし、小さな

爐を使つて飯事をする様の巧者なには、下女のハンナが感涙を催す程でした。デミは、祖父に字を教へて貰ひますが、其祖父の新案で、手と足とで、ABCの形を造るので、心と身體とが同時に運動をする事になつてゐます。

此子が早くから機械好きの傾向を見せたので、父親は大喜びですが、目に入る限りの機械の眞似をしては、子供部屋を散亂するので、母親は弱り切つて居ます。或時などは、椅子の後ろに箆をぶら下げて、其中へデーシーを入れて、吊るし上げる工夫をするのですもの。所が何程骨を折つても、うまく行かないので、哀さうに、デーシーは頭を彼方此方へ打付けられて居るのを（本人は兄思ひの愛らしい心で、不平も言はなかつたのですが）母親が見付けて、急いで制止しましたら、技師さん大不機嫌で「母さん。それ僕の昇降器なの。今デーシーを引上げやうとしてゐるのに！」

二人の氣質は、全然相違つて居る割合には、仲

が良くて、喧嘩も日に三度以上は滅多に爲ませぬ。勿論兄が妹を虐めるのですが、外に向つては殊勝に妹を同護ひます。此デーシーといふ子は、ポチャ／＼肥えて、色の美しい機械の宜い子で、人懐こくて誰にでも馴染みます。生得人に撫愛せられるやうに出来てゐる兒で、華やかに着飾らせて人中へ出せば、人が大騒ぎをすると思つて居ます。可愛らしい所作だらけの子で、天使であるかと思はせるやうですが、稀には人間らしい悪い事もするので、結局丁度よいのです。平常晴々した氣分で、毎朝寢衣の儘で窓へ攀ぢよつては晴雨に係らず「い、御天氣／＼」と言ひます。誰とも仲がよくなるので、この子に遇つては、氣六づかしい頑固の男子でも、降参して仕舞ひますから、況してや、子供好きと來たら嬉し涙に暮れるとでもいふ程です。いつぞやも、片手に匙を持ち片手にミルクの入物を持つた儘、腕を擴げて「私皆が大好き」と言つて、世界中を抱擁して、食べ

させてやりさうな態度をして見せました。

デミは、夜床へ入るのが大嫌ひで、いつかも、母親が子供達を早く寝かせて、父親とゆつくり夕食を食べやうと心構へをしてゐましたのに、左様の時に限つて、猶大困らせをさせるのでした。いくら母親がネンネコ歌を唱つたり、揺つたり、御伽話をしたりして、智恵限りの工夫をしても、デミは大きなく眼を明いてゐて、妹のデーちゃん丸くなつて疾の昔に、穩順しく眠つて終つてゐるのに、マチ〜と燈火を見詰めて居ました。やがて玄關の戸が明いて、父親が足音を忍ばせて食堂へ入る音がしましたので、

「母さんが一寸下へいつて、父さんに御飯を上げて来る間、坊は穩順しく眠していらつしやいな」と母が申しますと、

「坊も御飯」と、デミは直ぐ御馳走に加はりさうな氣勢をしました。

「イーエ、不可ません。デーちゃんのやうに、穩

順しく眠すれば、明朝のに御菓子を取つて置いて上げますよ。」

「ウン」と合點して、デミは早く寝て、朝にならうと眼をしつかりと塞いで終ひました。

此期を逸してはと、母親は大急ぎで下へいつて夫を迎へ、食事に取り掛りますと、食堂の戸の取手が妙にガタ〜として、幼ない聲が

「此處明け〜、坊入るの」と焦心さうに音なひました。

「アレあの腕白子僧が！ 獨りで眠れといつて置いたのなのに、まあ、下りて来たのですよ。風でも引かうと思つて」と母は出迎へながら、さう言ひました。

「もう朝」とデミはニコ〜して、ぞろ〜の長い寝衣姿で入つて来て、食卓の周圍を歩きながら欲しさうに御菓子に目を付けました。

「イーエ、まだ朝ではありません。ベッドへ御歸り。さう母さんを困らせるものではないの。御砂

糖の付いた御菓子を上げますからね。」

「坊は、父さんが好き。」と慧しくも、父親の膝に上つて御菓子に有り付かうとのデミの魂膽を、父親は首を振つて拒んで、さて母親に對つて、

「二階で一人で寝ろと言ひ付けたのなら、その通りさせなくては駄目だ、よい加減にして置くと、貴女の言ふ事なんぞ服従なくなるから。」

「エ、そうですとも、御出で坊や」と母は一位打つてやりたいやうな氣分で、デミを連れ去らうとして居るのに、デミの方では、部屋へ歸れば必然御褒美があると鑑定を付けて、上機嫌に跳りはねて居ました。成る程當にしてゐた通りで、目前の事よりは考へぬ母親は、角砂糖一つデミに遣つて、ベッドへ入れて、朝まで下りて來てはならぬと言ひ聞かせました。

「ウン」とデミは、満足氣に、砂糖を舐りながら計略圖に當つたものだと思つて居ました。

母は食堂へ戻つて、面白く話しながら御飯を食

べて居ますと、又デミが白衣姿でやつて來て、臆面もなく「もつと御砂糖母さん」と強請て、母親の非行を露顯させてしまひました。

「之は不可」と父親は嚴然となつて「此子にチャントベッドへ行く癖を付けなくては、とても落付いで何も出來はしない。貴女があんまり言ふなり次第になつてゐるからです。一度懲らすといゝんだ。ベッドへ入れて、獨り置いて御出でなさい。」

「でも、私が傍に居てやらないと、到底一人ではゐないのですもの。」

「そんなら僕がしてやる。デミ！二階へいつて、母さんの仰る通りにベッドへいらつしやい。」

「いや」とデミは、狙つてゐた御菓子を取つて、平然として食べ始めました。

「父さんに、そんな事を言つてはなりません。一人で行かないと、父さんが抱いて連れて行くよ。」

「あつち行け。父さん嫌ひ！」と此度は、デミは母親の裳へからみついて來ましたが、母親までが

見放して「非道い事をなさるなよ」と言ひながら、自分を敵に引渡したので、今更のやうに仰天して終ひました。御菓子を取られてしまひ、遊びは禁止せられ、力の強い手に抱かれて、厭だといふベツドへ連れて行かれるのですもの、口惜しくて堪らず。二階へ行く途中も、蹴るやら叫喚やらして荒れ廻りました。而して、父親が、右側からベツドへ入れると、左側へ轉び落ちて、戸口を目掛けて走り出す。すると、また不面目にも、捕へられて、ベツドへ入れられるといふ活劇を、繰り返しく演じた揚句、デミは疲れて力が無くなつて、聲限りにたゞ泣き立てました。泣いて嚇すと、母親は降参して終ふのですが、父親は柱かなんぞのやうに、一向無感覺で、慰藉てもくれず、御菓子も、子守歌も、御伽話も、何も無しで燈火まで消してしまひましたので、デミは案に相違して、尙の事厭になつて來ました。而して、口惜しさの念が靜まると共に、母の慈愛が戀しくなつて、「母さ

んく」と物哀れに呼んだものですから、それを聞き付けた母は、不惑さに堪へず、走り上つて來て、

「私傍に居てやりませう。もう穩順しくするでせうから」

「それはいかん。あなたが言ひ付けた通りに獨りで眠れと僕は言つてゐるので、今夜一夜かゝつたつて、其通りにさせなくては。」

「あんまり泣かせて病氣にでもなると」と、母親は我子を振り捨てた事を、自ら責めてゐました。

「いや大丈夫。もう疲れ切つて居るから、直に寢てしまふよ。そうすればそれで御仕舞ひさ。言ふ事は服従ものだといふ事が、この子にも了解たらしうし。まあ手出しを爲さないで、僕が宜いやうにするから、任せておきなさい」と、強くきつぱり夫が言ひましたので、妻は黙つて服従しました。デミは、ベツドの底の方へ潜り込んで、ちつとして居ましたから、

「可愛さうに、眠いのと泣いたので、もう弱つたろう。よく夜着を掛けてやりませう」と父親は愛兒の側へ寄りましたら、デミはその拍子に目を明けて、泣き吃逆ながら腕を伸して、「もう穩順しくするの」と言ひました。

母親は、階子段に坐つて、子供部室の森としてゐるのを不審に思つて、種々の事變を想像した揚句に、一層行つて見て、安心しやうと室内を覗きましたら、デミは平常の大的字形でなく、小さく丸くなつて、父親の腕に抱へられて、父の指を一本握つて、スヤ／＼眠つてゐました。父親も、亦兒の力が弛んで指を放す迄と、女程の辛抱をして待つ間に、愛兒との奮闘の疲れで、いつの間にか寢込んでしまつて居ました。

デミは、亦理屈張る性癖があるのを、祖父が愛して、よく此子と哲學問答をしますが、時には先生の方が、遣り込められて、傍の女達の笑を買ふ事もあります。ある晩、就褥前の一運動が濟みま

したら、

「御祖父ちゃん、如何して足が動くの」と、デミはつく／＼自分の足を眺めて尋ねました。

「坊の心意が動かすの」と老儒は、デミの柔い黄髪を撫でながら、眞面目に答へました。

「心意ッて何」

「心意ッて御前の身體を働かすもの。いつか御祖父さんが時計を明けて見せて上げた時、登條で中の車が廻つて居たらう。あゝいふやうなもの。」

「坊を明けて下さい。見たいから。」

「それは御祖父さんには出来ない。坊だつて時計を明けられないだらう。神様がキー／＼と巻いて下さるのだから。神様が巻いて下さる間は、坊が動いてゐるの。」

「さう」とデミは、珍らしい事を聞いたので、目を見張つて、「坊も時計見たやうに誰かゝ巻くの。」
「さうだよ。だが見せる譯には行かない。見て居ない時に巻かれるのだから。」

デミは、自分の背中が時計の内部のやうかと思つて、觸りながら、眞面目に、

「坊が眠睡してゐる時に、神様が卷くのだ。」と申しましたので、祖父はよく會得出来るやうに、懇々と説明して聞かせますのを、デミは身に染みて聞いて居ましたが、傍に居た祖母が案じて、

「赤ン坊にそんな事を話して宜いのですか。目の上に腫瘤を拵へて、難しい事ばかり訊きたがつて困るのですよ。」

「難しい事を尋ねる程だから、答へてやれば解るのだ。此方から考を注ぎ込むのではないが、心にある事を開發してやるのさ。今時の子は賢いから此子は私の言ふ事が皆解るに違ひない。坊の心意はどこにあるのだへ？」といつて御覽。」

デミは片足で立つて、一寸鶴の格好でゐましたが、澄し切つて「御腹にあるの」と言ひましたので祖父も、祖母も出笑して、それで哲學の御稽古が果てました。

母親は、いろ／＼の規則を拵へて、子供達にそれを守らせやうとするのですが、子供は遁辭が上手ですし、平氣で横着をしますし、可愛いらしく大人を誑すのですもの、何で母親がそれに敵ひませう。葡萄入菓子を作る日などは、デミは忘れず臺所へやつて來て、手傳をしやうといひますから、

「もう、干葡萄を食べてはいけませんよ。病氣になるといけないからね」と母が申ますと、

「坊は病氣になりたいの。」

「坊がなると、母さんが困るから、彼方へいつてデーシーと一所に、御菓子を拵へて遊んでいらっしやい。」デミは澁々立ち去りますが、怨みは心に残つてゐるので、好い機會があると、巧みに其を持出して、母親を閉口させます。御菓子も出來上つて、安心した母が二階へ來て、

「さあ二人とも穩順しかつたから、母さんが何でも御相手をして上げませう」と申ますと、

「眞實^{ほんと}？ 母さん」とデミは心に名案があるので、念を押します。

「エ、眞實^{ほんと}！ 何でも御前のしたい事」と、先の見えぬ母は同じ歌を幾度も唱はせられるか、御菓子でも買ひにゆく位の事と、高を括つて申ますとデミは。

「では下へ行つて、干葡萄を皆食べてしまひませう、母さん」と遣り込めます。

○佛蘭西國幼稚園の進歩

一九一〇年十二月以來、巴里セウイニーエ中學校に於てフレイベル講習會開催せられつゝあり。これフレイベル組合の催にして、幼稚園保姆、幼稚園女教師等のために開かれたるなり。

幼稚園保姆に向ては準備實習として理論的並に實用的の實習を課す。是れ佛國風に設けられたるフレイベル式なるなり。其課目左の如し。

教育學

フレイベル式——フレイベル式が佛國に及ぼしたる影響——フオン、マレンホルツ夫人——ミシユル

衛生學

兒童の衛生
フレイベル式の英國、米國、獨逸國に於ける傳播

動物學

主要動物に就いての談話

植物學

果實及び主要植物に就いての談話、類纂に散歩す

唯一神學 企畫篇を完結す(秋は收穫、冬は家、市街、交通等。

春は水、風、河、夏は野外の太陽)

地理學 地理學總論

技工練習 フレイベルの作業、玩具の製作

音樂 翼琴——唱歌(聽取練習)——童謡作歌練習)

繪畫 彩色、模型製作——木版描畫——御伽噺説明畫——寫生——模型製造(果實)

實地練習 (1)普通幼稚園に於て (ロ)セウイニーエ幼稚園に

於て上記實習は一週三回午後之れを行ひ、實地練習は午前並に

放課後の午後に行ふ、授業料は一ヶ年凡そ八十圓(二百フラン)

實習は二年間に亙る。第一年修了後には修業證書、第二年修了

後には幼稚園教師たるを得る證書を交付す。

試験は毎年度の終に於て行ひ、筆答試験には教育學、地理學、

動物學、植物學あり。口答試験、實地試験、音樂技工、實地練

習等の課目に就いて行ふ。

佛蘭西幼稚園保姆等は獨逸諸嬢の例に倣らひ佛蘭西フレイベル

會を組織したり。此會の目的はフレイベル式を習得し之れを家庭

に實用せんとするにあり。且つ母及び幼妹に幼稚園趣味を獲せし

め、又三乃至六歳の小兒の發育に一層親しく従事せんとするにあ

り。本會の發起人は前フェヌロン中學校女教師ファンタ嬢なり。

嬢は本會の事業に就きて述べて曰はく、三歳乃至六歳兒童の教育

に關する全すべての研究、中學校の兒童級を變じて幼稚園部となす

こと、少女をして幼稚園にて勞作せしむること等にあり。名譽會

頭は巴里大學助教授ルイリアー氏、會頭はセウール女教師養成所教

頭ファンタ嬢なり。(兒童研究第十七卷第三號)

鴈の歌

北陸沿線客舎にて 久留島 武彦

左の書翰は本會客員久留島早藏團長が北陸地方旅行中より特に編者に寄せられたものであります。北陸の秋の旅に此の唱歌を得られたといふこと、それを直に鴈信に托して都に送つて下さつたといふこと、そこに趣味横溢するものあるを思ひまして、わざとお手紙の文面そのまゝに掲載することに致しました。即ち此の手紙は久留島氏から會員諸君へ宛てられたものと見てよろしからうと思ひます。皆さんも樂譜にあはせて遊戯を試みて下さい。(編者)

昨夜満月、垂穂の稻の上に照り輝きて、冷氣窓より侵入る北陸の列車中、不圖尋常一年の唱歌集中にある『出た〜月が』の一節を想出で、數日前弊園にてこれに遊戯をつけたる事など考へゆく内これに附てうたはせたらばと左の如きもの出來上り候、未定稿ながら御笑草迄御目に懸け候

鴈の歌(樂譜は「出た〜」
月がの譜による)

來た〜鴈が

高い〜中空に

竿のやうに、渡つて

《遊戯》來た〜で鴈の組は一整に席を立ち、鴈がで兩手

アレ〜なくよ

淋しい〜彼の聲は

風が寒いと、なくか

《遊戯》第二節は鴈の組は黙つきながら尙行進を隨意の

方向につける。

周圍の組はアレ〜で鴈をゆびさし、或は手をたたくもよし、淋しい〜で兩手で胸を抱き、風がさむいとなくかで肩を縮くめ脇を脇につけて身をいさゝか蹲める、

を低くひろげ、一列に隨意の方向に行進を始める
高い〜中空をで翼にした兩手を更に肩より高く
上げ、はたつきしなから進み、竿のやうになつ
て遊戯室の中央に向け、正しく一直線に方向を更
め、すむ。

いや／＼鴈は

元氣な／＼強い鳥

月をたづねて、ここに

〔遊戯〕鴈の組はいや／＼で頭をふり、元氣よく羽ばた

きしながら、いろ／＼の方向に行進す、

周囲の組はいや／＼で姿勢を正し、鴈の行進を注視す、

右は前申し候如く『出た／＼月が』の遊戯に續けて行はしむる考にて、假りに一組を二つに別ち一半を月の組、一半を鴈の組とならしめ、先づ月の組より月の唱歌に入らしむ。

出た／＼月がで月の組一整に立ち前圓い／＼

まんまるいで互に手をとりに右に盆のやうな

月がでつないだ手を放し兩側より上に圓を描いて半圓を描いて兩手指に月をつくる

隠くれた月がで袂又は兩手で顔をかくす黒い

／＼眞黒いで顔は下向きに、蹠んたまい兩手を上に、
掌を前に向けて伸し、壁をぬるやうに、左

右に動かす、闇中墨のやうな雲にで再び袂又は兩手を顔にかくす

また出た月がで皆一整に起上り圓い／＼眞

圓いで前の如く手を盆のやうな月がで前の如く上

に月をつくる

鴈の歌は直ぐこれに續けて遊戯せしむる考にて、

月の第三節が終ると共に月の組も鴈の組も同音に

『来た／＼鴈が』をうたう、

此の時月の組は右(或は左り)向きに一列となり

歌と共に手拍子とりつゝ、行進を起し、鴈の組の出

来るのをさけて、次第に外輪にひろがり、鴈のう

たをうたひつゝ、自席に還らしむるもよく亦大圓を

描いて鴈の組の外に立たしむるもよしと存候。

斯くして鴈の歌終りがけに、月をたづねてここに

と繋ぎ置き候らへば今一度月の組を立たしめ、鴈

の組に交替せしめて月に終りたる空の鴈に風情を

添へていよ／＼澄み渡る月に結ぶも面白からんな

ど考へ居り候。

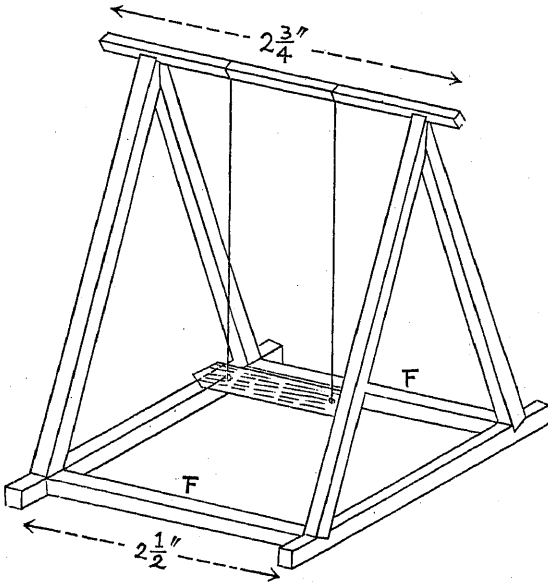
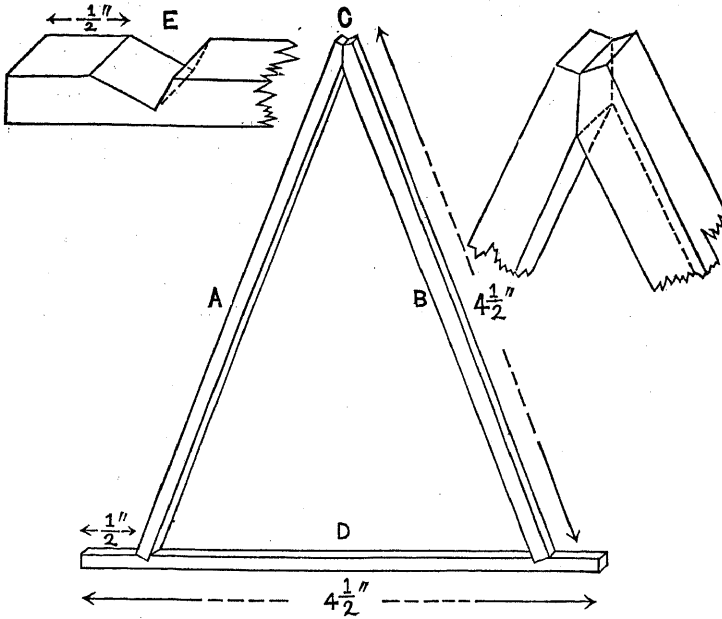
月の遊戯は弊園にて既に實驗致すところながら

鴈の方は今車中の想付き果して都合よく運ぶか如

何かは一つ御試しを願上候。(九月十四日)

家庭教育 手工應用 玩具の造り方

第三十二圖 ぶらんこ(其の二)



藤 五代 策 譯

燐寸棒長 h_{11} のもの六本を切り、其中の二本(A

及B)を取りて机上に二等邊三角形の形に並べ、底邊になる所を o_{11} だけ明けて置く。此の二本の棒の頂端の互に相合ふ所即ちCを圖の如く少しく削りて膠でピタリと付ける。次にDなる棒を造りて、其の各々の端より e_{11} を隔てた所に刻みを付けて之にA及Bの端をキチンと嵌める(刻みの付け方はE圖を参照)。

右と同じものを今一つ造つて、兩側の支柱とするのである。

膠が奇麗に乾いたならば、Fなる h_{11} の燐寸棒を二本切りて圖に示す位置に付け、今一本 h_{11} のを造りて兩側の支柱の頂端の凹んだ所に斜に嵌める。

平板を長 l_{11} 、幅 b_{11} に裁ちて、四隅を落し、兩端から e_{11} を隔てた所に孔を穿ち、此の孔に糸を通して其の兩端を上方なる横木に結び付けるのである。關節には留針を叩き込む必要がある。

第三十三圖 臂掛椅子

脊になる部分は平板を長 h_{11} 、幅 b_{11} に裁ちて、其上端のAなる陰影にて示せる部分を切り去る。燐寸棒 h_{11} のもの二本を切りて圖のBに示せる場所を附着し、次にCなる棒を造りてBとBとの上端と水平になる様に付ける。

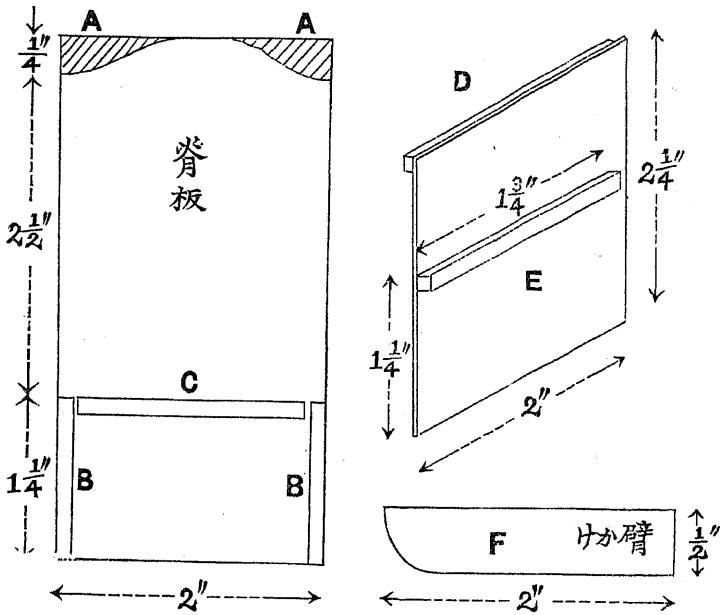
兩側になる部分には平板を長 h_{11} 、幅 b_{11} に裁ちたるものを二枚用ふ。一寸注意して置かねばならぬ事は、此の二枚の板は全く同じものではあるけれども、一枚は右手に當てがひ一枚は左手に當てがふ様に造らねばならぬことである。此の圖は右手の場合を示したものでなり。

そこで燐寸棒 h_{11} のものを二本造りて左右の板の外側の上端Dに付ける。今度は h_{11} のを二本造りて、内側の下端から l_{11} 隔りたる所に付ける。之は腰掛板の支へ木になるのである。

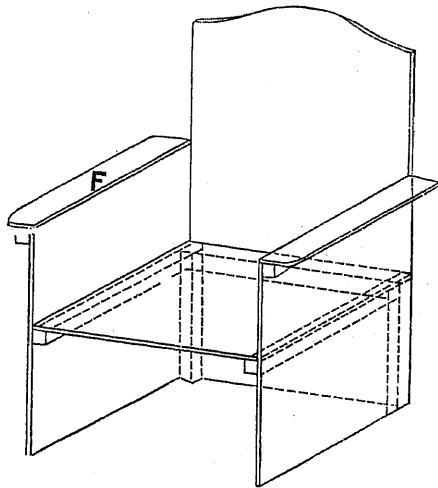
兩側の板が出来上つたら、之を注意して脊板に取り付ける。腰掛の部分として平板を h_{11} 平方に裁

ちて、兩側のE及脊のCなる支へ木の上面に膠を塗りて、此の平板を堅く附けるのである。

次に平板を長 $2\frac{1}{4}$ 幅 $1\frac{1}{4}$ に裁ちたるものを二枚造り



てF圖の如く其の一端を丸く削りて臂かけに用ふるのである。



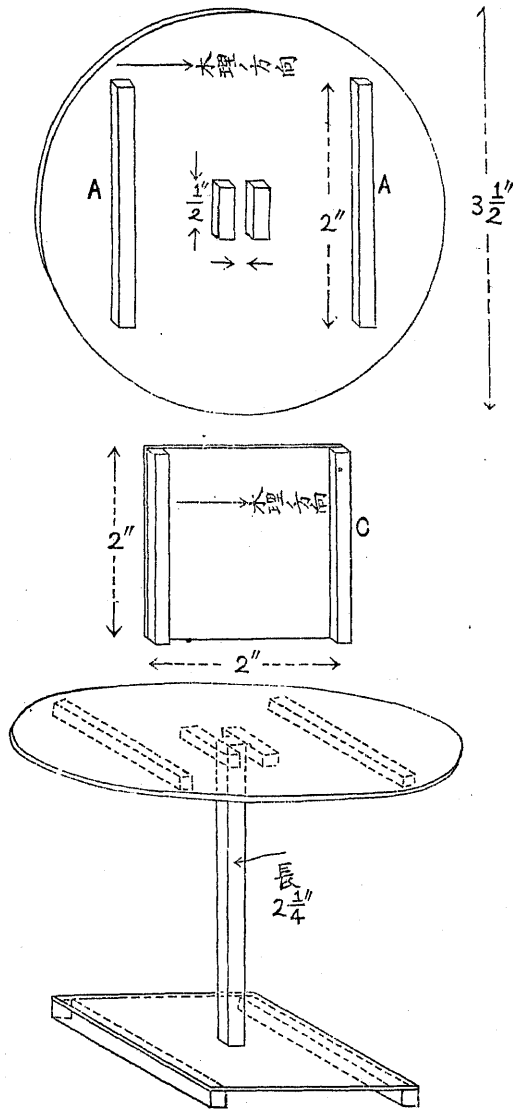
腰掛板ハ2平方

第三十四圖

丸卓子まるこし

第一に丸板から先きに始める。コンパスを以て開きて平板の上に圓を描き、之を鉄にて奇麗に切り抜く。燐寸棒長のものに二本切りて丸板の

燐寸棒一本の幅と同じである。臺の部分は、平板を平方に裁ち木理の切口に沿ふてC圖に示せる如く長を二側の棒を兩側に付ける



裏面Aの位置に木理を横切りて付ける。之は何の用をなすかと云ふに、第一、板の曲らぬ爲め第二木理の裂けない用心である。尙ほ裏面の中央にBなる長のもの二本を造りて付ける、其の間隔は

之が出来たならば臺の中心を求めて、此の點に長脚の脚を建て、又其の脚の上端をBとBとの間に膠を付けて挿入するのである。此の脚の上端及下端は留針で留めること。

机邊だより

○兒童の圖畫

(タンネル女史著「兒童」より)

如何に遙かに遠き大昔の人々でも華麗なものや稀有なものもしくは珍奇なものを愛し、又自分等の身邊を裝飾する事を好んだものである。現今でも所謂未開の人種の中に、屢々かゝる事實を發見するのである。それで此等の感情を強めるには、數多の動機が聯合されて居るのであつて、例へば異性から稱讚され度いと云ふ願、又は所有權に對する本能即ち總て自分の物にしたいと云ふやうな慾望もあるのである。けれども又、天性的に、自然に、華麗な、そして燦爛たるものを愛するの情があるのである。これが抑々美的感覺の幼芽とも見るべきものである。美術的創造或は發表の起源は、一體何であるかは、今尙盛に論じられる問題である。ところが、此の問題はあまりに實際的價

値から隔てられ、日常生活から遠けられて居るので、多くの人には自然法則ではとても説明する事の出来ない一種の無用事の如くに考へられて居る然し乍らこの美術的創造とか發表とか云ふものが最初は極閑散なる餘裕の産物であることは想像するに難くない。即ちかの元始時代の人々が、彼等の食物の供給が豊かであり、又休息も充分に出來或は狩獵して遊びくらしした事や、又かの勇しい戦も昔のことになつたといふが如き、至極氣樂な暇にかぎつて、起つたものであると想像するのは、蓋し最も理由のある事であらう。而して、彼等は獲物を捕へたり、殺したりした事を歌や踊の中に表し、或は又、鋭い石片を以て自分の狩用の小刀の上にそれらを描いたのである。

それで、今述べたやうな興味は兩方とも幼い兒童の中に現はれて居るのである、即ち彼等は華麗なものを貯へて置いて、それで自分等の身のまはりを飾る事を好むのである。而して又自分等のいろいろな經驗を、遊戯をしたり圖畫を畫いたりする中に表はすのである。さて、此等の興味の性質

を探索するのが、目下の目的である。兒童の美術的感覺の問題は當然圖畫、繪畫、模型法、音樂、及び物語りなどを含むのであるが、今此所では單に圖畫と音樂とのみしか研究する事が出來ない。勿論折にふれて、其他の美術の分枝にも觸れるのであるが、而して此所に一つ是非理解されて居なければならぬ事がある、それは、吾人がこれまで扱つてきた凡ての問題に於ける如くに、兒童をして全然成人の感化から隔離する事は到底不可能であると云ふ事である。少くとも兒童の趣味はその家庭にある繪、それからいろいろな家具の恰好とか、衣服の色合形などの影響を蒙るものである。

そして大程兒童が圖畫を畫き初める時分には、成人が畫いたのを手本として畫くので、それによつて大に助けられるのであつて、又兒童自身で畫いたものが成人によつて批評され、且つ稱讚されて進むのである。

今便宜上、圖畫の問題を二部に分けて見やう。即ち第一は圖畫の鑑識で第二は圖畫を實際に畫くことである。第一の部には、兒童の色彩感覺に就いて得られたる觀察も亦含まれるのであるが、嬰兒はその色が、何色であるか、形が如何であるかには一向頓著せずに、先づ第一は華麗な物體に目を付けるのであつて、そのものが動いて居る場合には特別そうである。

ブライエル氏の男兒は生後二十三日にして華かな日影さした赤い薔薇色の窓掛を見る事を大變に喜んだ、そして二才の時には色を見分けるやうになつたが、其の時分には、赤と黄とが最も好きで空色や綠色には少しも氣をとめなかつた。シン嬢

の姪などもこれと同様であつた。これに反してポルドウイン氏の幼児は、空色が最も好きで白や赤などもこれに次いで好んだ。残念な事にはポルドウイン氏の實驗中には黄色は少しも用ひられて居ないのである。それで褐色は彼の兒にもシン嬢の姪にもあまり好かれも、嫌はれもせぬのである。

此れで兒童には、概して華美な、光輝ある、明るい色彩が喜ばれる事が、大程解るのである。斯くの如くに或る程度までは色の何色であるかには注意せず、どちらかと云へば華かな空色の方が、黒ずんだ赤色とか何でもそう云ふ風な色よりも選ばれるのである。然し此の點に關しては何等特別な證明などはないのである。も一つ此所で注意して置かねばならぬ特性がある、それは兒童が色彩を識別する場合、その大部分を活動する所のものは對照であると云ふ事である。

形體を識別するには最初、運動、色彩及び大きさなどから離れる事は出来ないのである。一般に

兒童は、小さいものを好む傾向がある。それと云ふのは、恐らく自分の力がその物體の力以上であるとか、又はその物體を自分で保護し、愛撫してやる事が出来ること云ふやうな、大きな物體に對してはとても經驗する事の出来ない感情を味う事が出来るからであらう。で、物體の運動及び其の他すべて兒童の生活に關係ある所の種々なる性質に對すると同様に、形體においても亦物體が自分と同勢力の物を愛し好むと云ふ事は見られないのである、尤もこれは兒童の幼稚な而も一時的の考から起るのではあるが。

サレー氏は、兒童が花を愛すると云ふ事は兒童が美的快樂に最も接近して居るのであると考へて居る。それは勿論兒童各自の性格によつて花のそれぞれ異つた性質が彼等の注意を惹くのであるが、或る兒童は殆ど皆、花の香を喜ぶのであるが、又或者は自分を裝飾すると云ふ點から花を愛するものもある。此のやうに花を愛し好む事は極幼い時分

には男兒も女兒も同様であるが、少し大きくなる
と、男兒は此のやうな事に心を傾ける事を嫌うや
うになるものである。

總て以上述べたやうな事柄は主として兒童の特
性に從ふものである、明るい色もしくは華美な色
の方があつさりした色よりも先に取られ、物の價
値なども利用的の方が美術的よりも優るとせらる
るのである。此れは、かの兒童が景色の美を愛す
る事のいたつて稀であると云ふ事實の中にも表は
れて居る、即ち山岳或は大海の宏壯なるを見ては
單に恐怖の念を生せしめ、又美しいそして愛らし
いものを見ては兒童が自分の特に氣に入つたと云
ふやうな或る點に對する趣味の中に失はれて仕舞
ふのである。

此れは何處まで眞實であるかは知らないが、と
にかくギリシヤ文學中には自然に對する美的鑑識
を語り示して居る章句は誠に少ないのである、海
は不生産であり、又土地と云へば多くは田畑に耕

され、豊饒な、そして森林繁茂して居る如き有様
であつて、形容詞の如きは總て人間に實際的價值
あるや否やを標準として用ひられるのである。

最初、嬰兒は物體の象表に對しては、あたかも
獸類の爲すやうな行動をするのである、例へば鏡
面に映つて居る影を見て眞のものと思ふのであつ
て、これは獸が巧に描かれた繪畫を見て實物と思
つたり又野蠻人が水中に映つて居る自分の影を見
ては自分と同じ者が其處に居るのであると考へる
などと同様である。生後間もなく八ヶ月でさへも
己に或兒童は寫眞を認識する事が出来るのである
をしてあだかも實物に對するやうな考でそれに近
くのである。尤もこの位な時分には物を辨別する
力が餘程明かになつて居る。シン嬢の姪が生後十
四ヶ月の時に幾人が集つて寫つて居る寫眞の中か
ら顔が直徑僅に一時の四分の一、即ち二分程より
なかつたが自分の父を指示したと云ふことである
けれども、斯くの如き認識は、寫眞を寫眞として

認めるのとは大に違ふのである、何故と云ふに、この寫眞を一個の表號もしくは畫いたものとしてはそれ自身には何等の用にも立たぬのである。兒童が加ゝる事を知るまでには容易な事ではない、もう四歳にもなつて尙、寫眞に物を食べさせやうとする事が折々ある。或兒童が人々が教會に行くところの寫眞を見てその翌日になつて又それを見た時にも、未だ人々が教會に達して居なかつたので驚き叫んだと云ふ、又シン嬢の姪が三歳の折に一匹の羚羊が野羊仔を驚から防いで居る寫眞を見て自分の手をそれ等の間に置いて野羊仔を防がうとした又彼女が二歳の時に羊仔の上に枝が倒れて居る寫眞を見て其の枝を起さうとした事もある。

以上の事は、かの芝居を見て眞實の事と思つたり、又拵へ物のサンタクロースを本物と思つたりして混雜するやうな、すべてかゝる傾向の中にも見られるのである。それで、兒童が或物が或物の代表物に過ぎないので、それ自身には何等價値も

ない事を知るまでには余程容易な事ではない。符號を用ひる事は故意に得た力であつて自然的のものではない、そして最初は符號とその符號が代表する所の實物の間に種々混同が起つて、而も感情が強ければ強い程余計に混同が劇しくなるのである。此の例は單に兒童ばかりでなく、或人の中、即ち宗教的觀察の中にも屢々發見せらるゝのである。

兒童が既定の年齢において畫と物體との區別を明かに認識なし得ると否とに係はらず、彼等の嗜好は學校教室の裝飾と云ふ立場から見ると又一興ある所である。オーシース氏の觀察した所によるとむしろ張り合がないやうである、彼は兒童は概して美術製作品の描寫などには注意せぬ事を發見した。天然の儘の最も粗造な亞クロム酸のやうな色でも色彩ある繪、それから幼い兒童や動物が遊び戯むれてゐるやうな、所謂可愛らしい繪などはサンタクロースや、「母と子」などを除いては、常

に選ばれた。時折兒童に向つて教室内には幾何繪があるかと尋ねて見ると、多くの中から僅に二三の名稱を挙げ得るばかりであつて、其の他のものは、確かに彼等兒童には何等の印象も與へてゐなかつたのである、即ちこれらの繪は實際兒童の頭腦以上のものである。若し此等の事が一般兒童において眞實とするならば、教室の裝飾に關する問題の如きは決して普通世間の人々の考ふるやうな單純なものではあるまい。

吾人にしてもし資金と、雅致に富んだ繪畫、彫刻を鑑別する丈の智識との賦與があつたならば、裝置完全なる學校を設立する事も出來得るならんと常に企圖つて居るのである。自分が曾て二三の學校に居た事があるが、其所の教師の曰つたのを考へると左程資金もかゝつてはゐないやうであつたが其の割合に、成人の眼にも裝置が驚くばかり美術的であつた、然し其の裝置の完備と云ふ點からして如何程のものを兒童が獲る事が出來やうか、

此の問題はやがて幼稚園の教室に關しても起るものであらう。

さて吾人は此所で兒童の趣味と云ふ事を考へたらば又新しく得る所もあらう、かのマドンナや其他美しい幼童の繪畫も數多ある、動物界のものにおいては、ランドシーヤ及びローザボンハーの繪は初歩のものとしては好いものであつて、尙其他にも數多ある。敢て吾人の美學の基礎とする所を低くする要はないが、たゞ兒童の趣味に應じて主題を變更する事は必要である。而して若し此の事が都合よく遂行されたならば、従つて第八學組で用ひる繪の主題は幼稚園におけるそれとは大に異なる所があつて、兩方とも單に教師の趣味に合ふものばかりを用ひる如き事はない筈である。

リユッケン氏は更に實際的方面からして繪畫に對する嗜好を観察した。彼は兒童は特に自分等に關係ある物語りの繪を興味をもつて居る、そして折々は、單に其の繪の話丈をきかされても興味を

起すものであると曰つて居る。故に彼は初學の兒童においては繪畫は彼等の好奇心を刺戟し、如何したならば、其の繪を了解する事が出来るか、それを知りたいと思はせるものである事を暗に示してゐる。

兒童の創造力或は發明力に關しては、彼等の圖畫以外に多くのものをも含まなければならぬが今此所では其の他のものは論ずる事が出来ない。總て此等圖畫の形式は兒童が未だ一向幼稚である間は、遊戯に最も密接なる關係を有するものであるが、長ずるに及んでは、自然圖畫も遊戯的でなく社會的分子が含まれて來るので、従つて遊戯との關係も淺薄になるのである。

デューエー氏の言葉に、美術家の、工匠と異なる點は、前者は自分の仕事の中に社會的價值を認め且つ自己を社會的効價に對する一媒介者となす、即ち自分の仕事が社會に對して効價あるやうに努めると云ふ所にある、換言すれば靴屋商人でも自

分の商つて居る靴が、社會に對してどれ丈の可能力を有つて居るかを評價する事の出来る者は、即ち美術家たるを得るのであると、始の程は兒童は同じく美術でも、所謂、美其物のための美術と實用的の美術との區別が出來ないのである、たゞ漸次に自身にとつての價值あるものと、一般にとつて價值あるものとを離して見るやうになり、又實際用に立つものと美しいばかりのものとの區別も出來るやうになるのである。幼い時に兒童が活動するのは、たゞ其の活動する事自身が喜ばしいのであつて其活動の結果が自分自身に、又他にとつて必要であるから爲すと云ふのではない、此の點は遊戯におけると同様である。故に德行も兒童自身に道德的價值があるのではなくて其行を爲す事によつて他から稱讚を受けるからと云ふので德行を繰り返すのである。若し兒童が長者の談話によつて生せしめられるのでなかつたならば兒童の虚榮心とか、又は自分の美に對する愛とか云ふもの

は、一體幾才位になつたらば發達するのであるかを考へたらば余程面白い事であらうと思はれる。恐らくかゝる事もしくは美衣を愛するとか、又は最も幼稚な場合は例外としても、已に述べた如きすべての美なものを愛する情が青年になる前に現はれる如き事は到底豫期する事は困難である。

(つづく)

『子供展覧會』に就て

倉 橋 生

此頃世の中に行はれ出した、子供に關する新事實は子供展覧會といふものである。或は『あかん坊展覧會』或は『子供大會』等の名稱の下に行はれて、大に世の新しい注意を促して居る。その目的は兒童養育の奨勵にあつて、遠い目的としては國民の健康増進の一手段といふことである。即ち時を期し、會場をさだめて、多勢の父母がその愛兒を連れて集る。専門家諸君が審査員となつて

その子供等の健康を審査する。等級が附せられる優等なるものに賞が與へられる。斯くして、我子の健康についての注意が親達の間に喚起せられ、又兒童の養育上の知識を與へらるゝといふにある。私の思ふに、此の會が催さるゝ、此の主旨に就て、何人も不賛成のものはあるまい。「世の親達に我子の養育に就て一層注意せしめる」、誰れとて此主旨に不同意のものがあらう筈はない。私とても勿論大に賛成である。

しかしながら、此種の會の催さるゝことに就ては、遺憾ながら私は同意をもつことが出来ない。而して、私が同意なると否とは、此の會の主催者諸君及賛同者諸君にとつて、何等の關係もないことであるかも知れないが、事は我國の子供のことに關する。思ふ所を述べずには居られない氣がするのである。殊に此の種の會は、近頃行はれ、又行はれんとして居るのが第一回で、以後また再び行はれる計畫のあるといふことを聞いて居る。將

來の爲にも一言して置かざるを得ない氣がするのである。

私が斯ういふ催に同意しがたい理由は、どちらかといへば理よりも氣分が先に立つて居る。即ち一言にいへば、私自身の兒童觀及び父母觀が、どうも斯ういふ方法で斯ういふことをするのを愉快とし難いのである。其の結果から言つて、兎に角、此の主旨の爲に有効であり得るとしても、何となく、より以上貴重な或ものが犠牲に供されて居る怖れはないかといふ不快を除き得ないのである。

私は此の氣分を分解して、次の如き數箇條を得るのである。

一、親が我子の養育に注意するといふことは、斯ういふ外的獎勵によつて喚起せらるべき性質のものではない。少くも、斯ういふ方法を以て、我子に對する當然の責任と愛情とを刺戟せられるといふことは、親たるものにとつて侮辱といはな

ければならない。勿論斯ういふ會の主催者諸君と雖も、賞や名譽を得たさに我子の養育に注意するといふ様な、親として此上もなく恥しい親の存在を假定だにして居られる譯でもあるまい。しかし、懸賞による獎勵といふ様な低級な手段に結びつけられといふことは、親の道の尊嚴を辱むるものといはざるを得ない。

二、子供は假令一歳の該兒といへども、人としての尊嚴を有するものである。如何なる理由のもとにも多數他人の鑑賞の具にせらるべきものではないのは勿論、之れに似たる取扱ひをも與へらるべきものではない。即ち私は兒童に對する此の當然の尊敬の情よりして、あかん坊展覽會といふ如き名稱を聞くだに堪え得ないのである。殊にそういふ取扱を拒むことの出来ない年齢にある子供の尊嚴を多少でも冒すことは、私達成人の非常なる罪惡の様な氣さへするのである。元來愛玩鑑賞を目的とせる犬や猫ならば、之れを多數の鑑賞の前

に誇り得るごとく飼育したことを誇りとし得るものであらう。併しそれと似よりたる取扱ひを人の子に與ふべきものではあるまいと思ふのである。

三、私は斯ういふ企てが、親たる尊嚴に於て常人の標準に達し得ないもの、多い貧民社會等に於て行はれたならば、初めて條理ある計畫といひ得ることと思ふ、中流以上の家庭、殊に一圓の會費を以て日曜の午後半日を此の會に集り得る如き餘裕ある家庭の爲には、他の一層本來的な方法、即ち教育的方法によつて、我子の養育の注意を促進することが出来る筈である。少くも之等の家庭は此の種の會の様な方法によらなければならぬ程低級のものではないと思ふ。私は出来ることならば、折角の計畫を、そのまゝ、鮫か橋とか、萬年町とかの貧民街へ持つてゆかれて、説話による教育だけでは注意を促し難い、彼等無智なる家庭を教めるの具に供して貰ひ度かつたと思ふ。殊に此の會の主旨の一つとして、専門家の診斷を乞うて、つひ

心づかずに居た我子の健康上の缺點を知り得るといふ利も數へられて居るようであるが、その必要は、我子の養育に大なる自信を以て此會へ出品しようとする程の家庭に於ては、實は、そんなに存すべき筈のものではない。それが大にあるようならば可笑しい矛盾である。而して貧民街の家庭に於て、此の種の必要が實に絶對的に大であることはいふ迄もない。

四、私はまた、斯ういふ骨の折れる企を立て、まで我國の兒童の健康に注意され、國民將來の健康を懸念せらるゝ主催者賛同者諸君に是非願ひ度いことがある。それは他でもない、斯ういふことを盛大なる集會としてせらるゝよりも、『兒童健康相談所』ともいふべき機關を常設して、我子を専門の小兒科病院などへ容易につれてゆくことの出来ない親達の爲に、常時的相談相手となつてやつて下さつたらといふことである。此の事は今日初めて思ひついた譯でもなく、歐洲の例などで、是非

欲しいことに豫て思つて居たのであるが、丁度同じように兒童の健康問題を顧慮せらるゝ同志諸君の此の舉を見るにつけて、是非共お願ひし度いものと思ふのである。

以上縷々。若し夫れ單に子供すき連の趣味の會といふだけのことならば、こんなに眞面目に彼之と考へる方が野暮の至りと笑はるゝであらう。しかし、此の種の會の關係者諸君の中には、我國の兒童のために、常に尊敬すべき權威者の位置に立たるゝ人々が多い。私は世間の子供道樂者が、面白半分寄り集つて打ち興じて居るようなことと同視することは出来ないのである。殊に私の知れる若き愛兒家達の中に、此の種の會に就て、一通り贊成のような、しかも心の何處かに惑ふような感じを有して居る人が少くない。一方には其の人々に私の考へを參考に供すると共に、我國の兒童及び家庭の尊嚴のために、思ふ所を一言公にして置くことを禁じ得ないのである。

大道玩具の研究

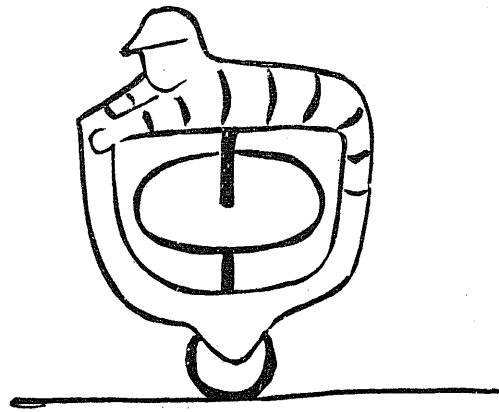
淺草公園にて

K T 生

淺草公園は私の家から程遠くないので閑暇な時にはよく遊びに行つて見る。淺草公園は理窟抜きにして面白い所であると同時に社會觀察の好資料を我々に惜氣も無く提供して呉れる寶庫である。

倉橋先生にヒントを與へられて大道玩具研究と出掛けると平常は餘り氣が附かなかつた玩具屋が多いこと多いこと。兎ても一度や二度の觀察では要領を得さうにもない。そこで先づ第一着手として觀音堂の階段下から仁王門に至る三十間許の石甃の兩側に軒を並べた露肆の玩具を見て歩かう、▼單線自働獨樂、一寸許の鉛製の獨樂であるが今までの獨樂とは少し毛色の違つた複雑なもの、烏打帽を被つた人が俯向いて水平に廻轉する車を抱いてゐる、そして足の先には垂直に廻轉する車が

附いてゐる、是等の人や車は皆固定されて一個の玩具をなしてゐるのである(挿圖参照)、遊び方法はといふと先づ水平に廻轉する車の心棒にある小



孔に糸を差込んで車を廻轉させると糸が心棒へ巻かつて了ふ、そこで人の頭のあたりを持つち乍ら糸を引張ると水平の車は陰りを生じて盛んに廻轉する。垂直の車の方を鋼の箍の上へ載せるとクルクルと箍の上を走り廻る、茶碗の縁へ載せても同じこと、糸を張つてその上を走らしてもいい。遊び榮えのある面白い玩具であ

る、物理學の力學の參考標本として立派に「教育玩具」の名稱が冠せられるものと思ふ。徑一尺許の鋼の箍と獨樂とをボール箱へ入れて一組金二十錢とある。

▼土製の相撲取り 肘を左右に張つた二寸許りの土製の相撲取りが二つ、土俵——紙に描かれた圓——の上に置いてある。腕と腕とを組合せ互にもたれ合せて立たせると相撲を取つてゐる様に見える。組合せ方に依つて相撲振りが違ふところがお楽しみであらう、稍原始的なものだが這麼のが子供衆のお氣に召すのかも知れない、これは一組三錢とある。

▼可愛らしい人形 これは前の相撲取とは雲泥の差異で綺麗なお人形さんである精緻を極めた藝術品である。私はこの種の人形の特に小さいものを好む。机の端に飾つてある私の小さい人形は如何に私を慰めて呉れるだらう。三寸位の小さい人形が一行に寝ねねしてつややかな頬に露肆の燈火を

受けてゐるのは又なく美しいものである。着物を着ないのが二銭、美しい衣を纏うたのが三銭、這麼安い藝術品が又とあらうか。マザリーインスチンクトを備へた純なる少女達は人形のために縫つてやる着物の中に如何に優しい心根を一針毎に縫込んで行くであらう。此の人形を賣つてゐた店には紙で折つた「姉さん」もあつた。私がまだ幼い頃男の癖に叔母さんにせがんで此の紙の「姉さん」を幾個も拵へて貰ひ石鹼の空箱の中に大切に藏つて置いたことを思出した。

▼小さき瓢箪 二寸、三寸位の瓢箪を並べて賣る露肆があつた。白い生地きぢのまゝのもあつた、黒褐色に塗つたのもあつた、黒條の入つたのや短冊形の金紙きんがみを貼付けたのもあつた。泣く子をあやしたり何かする時に與へる所謂「持ちて遊ぶ玩具」である、直段は一個三銭か四銭。

▼流行の蜂の巢玉 赤や青や紫に染めた日本紙を切つて貼つて蜂の巢玉の様にしたものがある、こ

れを二枚合せたボール紙の三邊へ貼り付けたのが「三つ玉」といふ玩具である。ボール紙をめぐり返せば蜂の巢玉は壘たまつて了ふ、これは一個一銭である、壘めば小さくなつて了ふ所が面白い、此の蜂の巢玉は種々な玩具に應用されてゐる。これを賣つてゐたお婆おばさんは一日平均百位は賣れますと云つてゐた。

御 注 意

○左の方へ本誌不着にて返送有之候。至急御宿所御報願度候

關谷 いま氏 森川 つぎ氏
鳥居 景良氏 岡本 あい氏 渡邊 芳氏
田中 とし氏 初瀬 ふさ氏 辻 さよ氏

○轉 居

東京府下代々木山谷一二四

倉 橋 惣 三

ゴルドン女史著
菅原教造譯述

美
學
講
話

全十八講

『婦人と子ども』附録

第一講 入門

第二講 心像の話

第三講 感情の話

第四講 藝術の起原と職分

第五講 リズムの話

第六講 舞踊の話

第七講 音楽の話

第八講 色彩の話

第九講 線と形の話

第十講 圖案の話

第十一講 建築の話

第十二講 彫刻の話

第十三講 繪畫の話

第十四講 言語の話

第十五講 詩の話

第十六講 戯曲の話

第十七講 散文の話

第十八講 美と藝術

第十講 圖案の話

— 目 次 —

定義——寫實的興味が根元——反覆——リズム——系列に於ける位置の効果——大きさの効果——對稱又は形の均合——興味の平衡——垂直軸線に於ける平衡——中心的平衡・對・軸的平衡——錯視の効果——活動と安靜の合致——條件への順應

定義 「圖案とは、人間の思想感情の有する秩序である、又其思想感情を表現する多種多様な活動を意味する」と、ロスは云ひ、バチエルダーは更に「よき圖案とは、常に健正であつて規則的に整頓し、且徹頭徹尾鞏固なるもの」と申して居ります。要するに圖案と云ふ事は、どの藝術に於ても、常に或目的の表現であり、又或觀念に適應せんが爲めに改修された材料であると云ふ事が出来ます。尙之を少し精しく説きますと、圖案の藝術點には、必ず人爲的に加へた規則又は法則の跡が

あります。第二講心像の話で、創作的想像とは、相異なる物と物との間に連絡を見出し、其の類似點を強める事であると申しました。圖案も之と異なる事はありません。圖案家は或物即ち或材料を持つて居りまして、それを或他のもの即ち或觀念に類似するやうに仕上げるのであります。たとへば三つの花を採つて三角といふ觀念に適する様に置いたとすれば、それで圖案を作つたと申されるのであります。

裝飾的圖案の意味は、之を寫實的描寫的圖案と

奇怪なる誇張的圖案とに比べ合せて見ればよく分かります。眼に訴へる藝術の圖案の材料は、畢竟目に見えるもの、即ち人間、動植物、無生物等に由來して居ります。第一に、圖案家が斯う云ふ材料を取り扱ふ時に、それを改修する事は餘り念頭におかずに、専ら忠實に模寫するならば、その作品は寫實的と呼ばれます。第二に、圖案家が或觀念を以て其の材料を整頓し調和するならば、即ち其の材料と適當な然も特種の形にあてはめるならば、その作品は裝飾的と呼ばれます。第三に、圖案家が專恣になつて材料に課する觀念の度が勝ち、觀念のために自然の形が破られますと、其の作品は空想的若くは奇怪と呼ばれます。材料を取扱ふ上の此の三つの法則は、用ひ様に依て何れも美しい結果をも醜い結果をも生じますが、中に就て最も美しいものを出す機會の多いのは、第二の方即裝飾的方法であります。外の二種は共に極端で、寫實の方は自然其儘と云ふ極端に奔り、奇怪の方は



思ひ切つた人間の物好きを示し過ぎます。右の圖と左の圖とは、鳥の形を變改した方法を二つ表はして居ります。前者は通例の裝飾法、後者は誇張した奇怪な方法であります。

寫實的興味が根元

近頃の人類

學者の説に依りますと、原始藝術は最初には寫實的であつた。又は少くとも寫實的ならんとしたものであると申します。野蠻時代には、藝術家は色々の目的の爲めに、人や獸の形を表はす事を喜んで、單一な線などに餘り興味を感じませんでした。現



存の未開種族の所謂「幾何的」圖案には、實際さう云ふ種族の代表的價値又は特有の意をもつてゐるものが澤山あります。生きた形を斯様に抽象的

に若くは象徴的に表はす様になつたのは、或場合には漸次減少的過程即ち省略した結果と見ることも出来ます。此の略筆は、勞力節約の工夫でもあれば、亦藝術的の工夫でもあります。



れば、亦藝術的の工夫でもあります。

此の圖はさう云ふ單純化の段階を示して居るもので此の發達の最後の段階だけを見れば、是も寫生に始まつたものとは一寸思はれませぬ。是に依て推せば、抽象的の線及簡單なる形其の物に對する趣味、若くはむしろその直接的美的效果に對する趣味は、線の代表的又は間接の價値に對する興味よりもおかれて生じたものであると申すことが出来ます。

東洋人に在ては、猶代表的價値に對する興味が、最も裝飾的な慣例的な作

の場合ですら附き纏つて居ります。バードウッドは東洋風な敷物の圖案の象徴的な點に就て、斯う云

つて居ります。「如何なる種類の裝飾にもせよ、深い複雑な象徴主義が、東洋風の敷物のあらゆる名稱に通じて行き渡つて居る。即ち敷物それ自らが空間と永遠とを豫表して居り、全體の模様、専門的に云へば填充物は、生氣ある美を持つ有限の宇宙を表はして居る。また使つてある色にも、それ／＼意味が有つて、圖案は神話なり、自然なり、人なり、獸なり、花なり、皆隠れた意味を以て居るのである」と。藝術に對する斯かる態度に引きかへて、近代西洋人は、藝術品の眞の意義は、その表面の價値、觀者に對して與へる印象にあるので、圖案家の人しれぬ夢や隱微な意味にあるのでは無いと信じて居ります。繪畫の寫生的即ち代表的性質は、幾分過去に關係のあるもの、即ち其の繪の由つて起つた原物に強く關係して居ります。が吾等文明人の美的態度は、寧ろ現在の感覺の満足に關し、在るがまゝの繪及その刺戟し暗示し得るものに關して居ります。此の刺戟的性質は過去ではなくて將來

に關係のあるものであります。但し是は智的では無くて情的の關係であります。

藝術家が藝術上の純然たる寫生的目的を離れますと、何か明確な指針を失つた様な氣がいたしません。忠實な再現の原則をすてれば、其代りに他の原則を採る必要が起るのであります。そこで製作の指導たるべく一團の傳説が出来て来て、其の法則にさへよれば、如何なる場合も美を得とは云へぬまでも、それに依れば美を得る事も出来、又得る事が珍らしくないと云ふ事は容易に證明ができます。

反復 それ自身としては無意義な線や形が反復されて始めてものになつて居ると認められる事もよくあります。反復の快い効果の一例は、百六十四ページに説明する筈の實驗に出て居ります。此の検査に用ゐられた圓は、同じ要素を反復した一系列を成して次々に大きさが増すやうに成つて居ります。所が二つ三つ四つ位の圓を列にして

見せますと、被験者は餘り快感を感せず。一向「意味」のない實驗であると思ひました。然るに十か九められました。米國の心理學者ウイットマーも亦或形が一系列を成して居れば、被験者はその形に別段意味がなくとも不服はないと云ふことを實驗で見出しました。系列中の一要素であると云ふ事實は、立派な意味であるものと見えます。斯う云ふ事實は習慣の法則で心理的に説明が出来ます。何にもせよ、習慣的なもの、又は固定された規則と合致するものは、議論に及ばぬものとして受け入れられるもので、慣れれば従つて意味が伴ひ、それ以上に取り立て、意義を要求することはない様に思はれます。

米國の心理學者ローランドは、いろ／＼變つた集め方にした垂直線を材料に採つて反復して空間的形を實驗致しました。その結果、反復された一系列の中には重大な要素があり、それが繰り返さ

れて重大の系列となり、一方には劣少の要素が反復されて重大な系列と交替或は補充の系列を成して居ることが分りました。例へば此の



圖の三筋の反復は優大の系列を構成し、一筋の反復は劣少又は更替の系列を作ります。もしこの形に一本づつの筋が無かつたならば、更替の系列は三筋と三筋との間の空間で作られます。此實驗者の云ふには、大系列中各要素は、その系列全體の効果を破壊せずに変化することが出来るが、交替の系列の要素に変化が來ると、全經驗が擾亂されると申します。(彫像の列ならば、各像が互に異つて居るのは快感を喚びますが、像と像との間の空間が不規則では不快を催さ

せるのは睹易い事實であります。)同じ實驗者は、視覺に訴へる系列にはリズムがある様に感ぜら

れ、此の感じは直接的である、即ち或物が規則的に去來すると云ふ智識から來るのではないと云つて居ります。耳に訴へるリズムと、眼に訴へるそれとの間の類似は非常に強いのであります。(學者に依ては視覺對象に對する「リズム」なる語の範圍をもつと狭くとつて、ローランドの用ゐた様な系列は、當然リズム的とは云へぬといふ人もあります。此點に就ては後に又申します)。反復に依て起る快感に就て、なほローランドは系列は觀察者に或反應を起させる。その反應が其人のリズム的組織と一致すれば快とよばれ、しなければ不快とよばれる。或種の人に於ては、此のリズム的反應が非常に顯著で、經驗の意識的部分として感ぜられる位であるが、又人に依ては系列の對稱的性質の方がそれよりもつと際立つて感ぜられるのもありと云つて居ります。

嚴正な形の反復は、模様構成の眞の土臺である事は、模様は學術上の語では「反復」として知られ

て居るのに見ても分ります。代表的即ち描寫的の藝術に使はれる時には、反復は幾分形を變へなければなりません。彼のバルテノンの小壁

の如きは、人物をどこ迄も繰り返しては居り乍ら、姿勢と性質とを極りなく變化させてあります。もつと硬い反復の型は、念珠の紐や、刺繡の模様や、見え隠れの圓柱の溝の場合の様に、從屬的な關係で繪に用ゐる事が出來ます。

リズム

空間名辭としてのリズム

は、特種の方向に規則的に進む運動を暗示する様に、形を配置し又は反復する事を意味して居ります。ロスは、「凡ての空間リズムの場合には、リズムが人を導く方向、人がリズムに従つて行く方向が、明白でなければならぬ」と云つて居ります。此の制限によれば、左の如く方向が等しく何方かでも讀める様なのは、嚴正なリズムのもの

では無く、右の圖の如く、必ず左から右へ讀まれる様なのがリズム的なのであります。無論斯様云

ふ形を見るにも、右から左へ眼を移せば移してゆかれぬことはありませんが、併し形自身の暗示を

感ずる人は、誰しも先づ左から右へ讀みます。右の圖では、要素又は單個の意匠



がひとりで運動を起させて、圖案全體として唯だそれを反復して居るに過ぎませぬ。併し離れ々にした個々の要素は



運動を持たずとも、それを合はせて成した系列にリズムを得る事は出來ます。此



の圖のやうに單純なものから漸次に複雑なものにうつつて行く系列は、眼を一番



複雑な形の方に引きます。又百六十三ページのa圖及びb圖の如く大きさ又は間隔が次第に減つて行く一系列は、一定の方向に向かつて運動の感じを與へます。aは一點に歸聚して來る線のために

運動の感じを起し又は線が一と所に集中して居る

爲めにさう云ふ感じを與へるので

c あります。c 圖に於けるが如く、通

景は a と b との効果と同時に收め

ることがよくあるので、従つて其

の出會點に眼を惹く力がありま

b す。一定の方向への整齊的運動の

意味に於けるリズムはローランド

が反復の實驗に使用した形にはあ

a りません（百六十一ページの圖參

照）がそれでも其の時の被験者は、

聽覺リズムに似た何物かを實際感

じたのであります。其時の被験者の經驗したリズ

ムは、その方向が系列自身によらず人に依て極め

られると云ふ意味に於て、これを主觀的リズムと

看做せば、視覺的系列に、應用されたリズムなる語

の二様の使ひ方も許されます。それで運動の方向

が系列自身に依て極められぬ限り、系列には客觀

的リズム無しと云ふロッセの説に同意が出來ます。

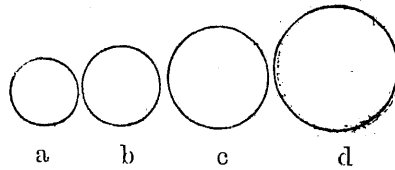
系列に於ける位置の効果

簡単な形に對す

る快不快の判斷は、その形の包含される系列の性質に依て影響をうけます。故に或形を系列中の或場所に於けば、特に牽引力を強めることが出來ます。ウットマーは、簡単な形の時には系列の中央のものが選ばれる傾向を見出した。著者の實驗の時には（數は制限す）、與へられたる系列の兩端にある形以外のをえらぶ傾向がありました。大きさの違ふ圖を用ゐて、一度に二ツ・三ツ・四ツといふ風に、一度に十一まで次第に變つた系列で實驗をしました所が、三ツ一度に見せますと、中央のを最も快適としてえらぶ傾向があり、四ツもしくはそれ以上の圖を一緒に見せますと、前には隣の圓より劣ると見られたのでも、平衡の中心點又は支點の邊にあたれば快いと思はれるのでありました。

次のページの圖では、c が最も快適のものと考えられました。d を見せない時は b が一番好いと云

はれました。同じ實驗を均合の異なる矩形にも試みましたが、矢張り隣接矩形の均合に依て好悪は定められました。かう云ふ點で、簡単な形を示して居る系列の如何に依て、其の形の美的判斷に影響



を來すといふ通則の説明が出来ます。上述のよりもずつと廣い範圍で實驗をして見度い者であります。其の結果は大抵美的判斷に於ては、極端を避けて類型的のもの(必ずしも平均せる形には限らず)をえらぶ事が證明されませう。

大きさの効果

一の美的性質としても用ゐられ、

又崇高の屬性となる事がよくあります。神々及半神的勇者達は、人間よりも大きいものとして表はされて居ります。自然現象中の大きさを描けば能く印象を強めますし、建築に於ては大きさが確に全效果に重大な影響を持つて居ります。併し大き

さは單に精力及力の指標としてののみ效果のあるもので、組織の細小、堅密、精巧も又力を示すものなる以上、大きさは如何なる場合にも必ず美の要素であるとは云ひ兼ねます。英國の美學者は細小は美に必要なものであるとまで申して居ります。要するに大きさは力を意味する時に、小ささは精巧を意味する時に、兩者共に快適であると云ふのが安全で且明確であります。

對稱又は形の均合

色彩の均合についてお

話しました時、布置の中心點は假の支點であり、觀者に好い均合の快感を與へるには、兩側の重さが平等でなければならぬと申しました。完全なる對稱と云ふのは、一半は方向が反對である丈けで形は全然正確に他の一半と同じであります。不均合の形より均合のとれた形を人が好く理由は、模倣運動を基礎にして説明が出来ます。人體は左右均一に對稱的に出來て居り、兩側に對稱的に活動的には活動を起させる刺戟は、凡て肉體の組織と

一致することとなつて居ります。さう云ふ對象は「自然」に且つ調和的に人を刺戟致します。對稱的活動は快いもので、肉體の兩側の質量と活動とが均合つて居る時には、人はいゝ氣持がします、従つてさういふ條件の備はつた時には、外物も亦心持よく見えます。原始藝術にはもう一つ對稱的裝飾の快いことを示してゐる要素があります。未開人は自分の身體を飾る時なり、人と互に飾りをし合ふ時なり、その圖案は必ず對稱的なものに基いて致しました。それで次に平面に圖案を施す均合にも、矢張り對稱的にする傾向が持續したものであらうと云ふ事が出来ます。

平衡即ち均合が良く取れて居るのは快適ではあります、完全な幾何的平衡は、慣例的裝飾美術と建築的の形の外には、滅多に使はれませぬ。それ以外の均合には、多少變化が無くてはなりません。ラファエルは畫家の爲し得る限りの形式の平衡をやつたので、彼のシステイナのマドンナの如きは、

其の適例であります。この畫では全然同一のものを兩側においたのではありませんが。形や團集が殆ど相等しく按排されて居ります。即ち上方の兩側角はカーテンに配するにカーテンを以てし、聖バーバラに配するに法王シスタスを以てし、下方の端では天使に配するに天使を以てして居ります。

對稱又は平衡せる一對の線なり、團集なりの兩側を美術家は「問と答」と呼ぶこともありませぬ。此の圖のcの如きは問で、bが其の答をして居ります。クレーンは「一線一畫と雖も答」即ち應通的反響的線又は團集しては描く事を得ず」と云つて居ります。此の説とアンテシーデント及コンセクエンスとして前に申しました音樂構成上の原則と類似を考へてみるのも面白いことでありませう。

興味の平衡

對稱の餘り現れて居らぬ繪も

澤山ありますが、さう云ふのは「隠然」の對稱の
様に要素を配置してあります。バッファー女史は
これを代用的對稱と呼び、其の原則を明白にする
ために、繪の「重量」の項目を以下の様に分類致し
ました。其説によれば(一)團集、(二)深さ亦是通
景、(三)線・運・動及注意の方向、(例へば畫中の人
物が見て居る方向)、(四)興味と云ふがあると申
します。好い繪では、大抵此の條項の二つが、他の
二つと對等になる様な均合が見出されます。尤も
一條項が特に強くて、他の三つがそれと均合をと
る様な場合は別であります。例へば肖像畫の場合
に人物と共に花なり動物なり、何か興味をひくも
の團集が一方にあれば、觀者はその向側に通樂が
深きか線の方向か、何かさう云ふものを豫期致し
ます。「代用的」對稱の方では、小さな面白いもの
と大きいさほど面白からぬものとの平衡なども
あります。

形の對稱と興味の對稱とは、もとより繪畫的に

快適な形狀ではありませんが、併し共に絶對的に緊
要なものではありません。際立つて不平均な繪は
大抵不快なものにきまつて居りますが、併し繪に
依ては、對稱の概念もしくはそれに對する感じが
まるで浮んで來ない様に見えるものもあります。例
へばワットの描いたエレン、テリーの肖像の如き、
興味を惹くものは何もかも團集の大部及注意の方
向と共にずつと左側によつて居りますし、日本の
綿繪に左右均一の對稱などを見出さうとするのは
不可能で無いまでも余程困難であります。

かふ云ふ場合には、平衡の不足などは感せられま
せんし平衡などと云ふ考へが第一起つて參りませ
ん。

垂直軸線に於ける平衡

今一つ平衡に關す

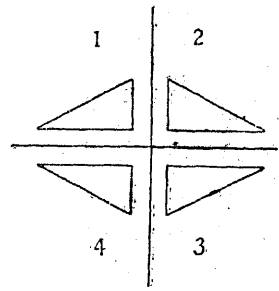
る問題は、布置の上部と下部との間の團集及空間
の分布であります。右半部左半部の配置は對稱に
なつて居ても、上半部と下半部とが全然非對稱的
なことがあります。一般には頭勝ちになるの避を

け、且いは充分の重さを作に添へるために、中央から上よりも下の方に力を入れます。ピーアスの實驗で、安固といふ事は左右の平衡より一層重要なものであると云ふ事が分かります。ピラミッドを顛倒すれば、不快な不安定な様子の建物となります。確固たる平衡は明白な標^{しるし}は底の幅であつて、最も重々しいものは多少目立つ位にその頂點へ向けて傾斜して居ります。併し美しく且よく平衡した形は、凡そ頂より底の方が大きいとは云はれませんが。物體の團集を繪の頂邊近くに描いて非常に好い効果を收めることもありませう。優美な花の集まりが上部を満たして、下部には唯だ其のほつそりした莖だけの繪もありませうし、ずつと高い處に雲が浮いて居たり鳥が飛んで居たりして、下の方にはゴミの仄かな風景の線許りで、殆ど空虚な空間の様なものもありませう。何故かう云ふ繪は顛倒したピラミッドの様に頭勝ちに不安に見えないのでありませう。あれはどう云ふ物は死んだ活力

の無い重さではなく、轉い織美なものを現はして居るからであります。空虚な空間を下にして繪の中心より上に花・雲・鳥などを書くのは、實にその性質によくあてはまつて居るもので、そのふわ／＼した心持と轉快さをよく現はします。それで此の二つの事實は、同一眞理を分けて居るもので、安固を得んが爲めには大きな團集は中心より下になければならず、その團集に重いと思はれる時には、斯うするが適當であります。又自由と輕快とを得んが爲めには、團集を中心より上においても好いので、團集が何か轉いものと現はす時は、斯うするが適當であります。どこまで觀念的要素が繪に於ける「重さ」の感じに影響するかと云ふ問題を、實驗的に證明することが出来たらば面白からうと思ひます。

中心的平衡、對、軸的平衡 此の圖に於ては左

側の1と4とが、右側の2と3とに對して水平軸線上の平衡を成して居ります。一軸線上に於ける



此の二様の平衡とは又別に、2と4と、1と3との間にも平衡の關係があります。ロスはこれを中心圍繞の平衡、又は二重轉回の平衡と呼んで居ります。

若し1に垂直線軸をまはらせれば2と符合し、次に水平線軸をまはらせれば3と符合します。此の種の平衡をよく説明してゐるものは北齋の波の圖であります(二十七頁の參照)。

此の波の繪は、視覺的の形に就て今迄申しました凡ての點を、明白に説明して居ります。包圍矩形の邊は三と二の割合(即ちフェヒネルが其金線の次に置いた割合)であります。二つの最も顯著な線は、幾筋の從屬線と同じく蛇狀の形であります。左方の波の團集と、右方に出て居る空氣の深さ(彩色版には現はる)の効果との間には、代用的對照があります。又右から下り落ち乍ら左から搖り返さ

れた波の中に見える對向せる力の激動があります。波の輕快さは波頭が思ひ切つて繪の頂端に近いと云ふ事實に依て増して居ります。又蛇狀の線は織器に反復されて二つの主な線、xとyとの間には二つの回轉の平衡の關係があります。

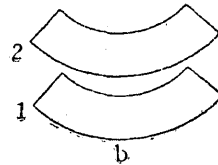
錯視の効果

藝術家は眼の錯覺即ち錯視を利用し、又は其の缺點を償ふために、其の性質を認めるのが肝要であります。次にさう云ふ錯視の中で最も普遍的で明白なのを挙げましよう。

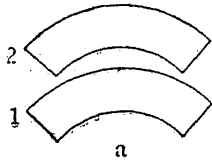
(一)垂直の距離は水平の距離に比し多く見過ぎられる傾向があります。故に眞の正方形はその廣さより些か丈が勝つて見えるので方形に見せる爲めには圖案家は幾何的の正方形より稍や幅廣にしなければなりません。寸法は正方形を成して居るものよりも見掛けの即ち錯視を推定に入れた正方形の方が美發快感を與へるものであるとは實驗の所であります。

(二)視野の上部に於ける大きさは余計に思はれ

る傾向があります。Bの字は上下とも大きさが平等な様に見えますが、これを顛倒して見ると、普通の上の方の部分を餘計に見過ぎてゐることが分かります。



(三)此の形體の上部の誘張は他の錯視に依て反對になることもあります。此の圖aの1は同じ大きさであり乍ら、2より稍や大きく見え、bの1は矢張り同じ大きさの2よりも小さい様に見えます。



(四)彼のよく知られて居るミューラー、ライヤー錯視は、藝術上の取扱ひ方に影響を及ぼす錯視であります。線の見掛けの長さは、それから出る線の方を變へれば變化することが出来ます。

(五)錯視の藝術的矯正の一例は、クラシックのものでは希臘の寺院にあります。寺院の平臺は垂

直線を支えて居る長い水平線の見掛けの撓みを矯める爲めに、中央で上方に彎曲して居ります。

エンタシス又は圓柱の外側のふくらみは、硬い直立線が多少凹状に見えるのを防ぎます。圓柱の軸線は、其の頂點で少し歸聚する様になつて離れぐゝに見えぬ様にしてあります。

人の免れ得ぬ錯視は、まだ外にいくともあります、すし、上述の錯視にもいろ／＼の形がありますが、兎に角錯視が藝術製作上に及ぼす影響の重大なことだけはこれで述べ終りました。

活動と安靜の合致 どんな藝術品でも、活動的線許り、又は靜平な線許りでは出来ません。激奮のみしか與へぬ圖案は人を疲勞させ勝ちですし、安靜のみしか與へぬ方は人を倦怠させ勝ちであります。どちらの場合にしても眼は變化と休安とを求めます。こゝでも亦刺戟と休息との平衡を稱すことが出来ます。バップト女史の方式を各藝術の標準に致しましたが、さうすると作に依とは安

息より刺戟力が勝つても差支のない事實を許すことが出来なくなりませう。兩方の量には關はらず、活動と安靜との「合致」を採つた方がもつと自由な方則でありませう。

條件の順應 藝術家が新らしい形を作る場合には、單にそれを「意匠」するのではなく、何かの爲めに又は何等かの要求に「應」ずる爲めにそれを意匠するのであります。或る空間の面の裝飾を頼まれた圖案家は、その範圍内で工夫せねばならぬ或制限に出會ひます。その空間は或形の或大きさのもので、建物の或位置を占めるものであります。建物自身が既に或目的の爲めであつて、圖案は或概念をあらはす様に又は或出來事を記念する様にと望まれる事もありません。是等は凡て藝術家の想像を非常に妨げる様に一寸思はれますが却てさも無ければ考へられぬ線や形の配置に就て暗示を與へる事があります。註文なしでする時は自分で制限を作らねばならず、暗示の出で來る様な情況に

居るつもりにならなければなりません。作品の中では或線は他の線への應答であるが如く、全體としての作品は、情況若くは條件に對する應答であります。此の特種の條件に従ひ且それを表現することに依て圖案は個性を帯び特質を得る様になります。藝術家は其の古い心像を新らしい情況にあてはめ、新らしい條件と合致させて茲に始めて何か新しいものが出來るのであります。我々は一目で如何なる空間のために或形體が意匠されたが、方形か、圓形か、三角有壁か、孤形面かと云ふ事が分ります。斯様な事が出來るとすれば、圖案は其の空間的條件を表現し、且それに適應して居るものであります。又それを作らせた情操が他人に分かる様な圖案は、亦別の條件を表現し且それに適應して居るものと申すことができます。